

里山の生態系サービスとその持続的利用

湯本 貴和

みなさんこんにちは、総合地球環境学研究所の湯本貴和と申します。今日は「里山の生態系サービスとその持続的利用」というタイトルでお話をさせていただきます。

龍谷大学では里山学というテーマで、研究活動が続けていらっしゃいます。まず、里山学が設計科学になるにはどうすればいいのかという問題提起をさせていただきます。わたしたちは現在、環境問題の現状を分析するだけではなく、これから環境をどう設計していけばいいのかを考える時代にきています。昔のことを学ぶということは、もちろん非常に大事なのですが、その学んだことを基にして、これからどのように世の中をつくっていくのかということが問われている。それをここでは設計科学という言葉でよぼうとしています。それは自然の処方箋とっていいかもしれません。

処方箋はもともと医学のことですが、現代は医学・医療の世界でもインフォームド・コンセント、つまりちゃんと事実を了解された上で治療するということが非常に大事ですね。今、まさに里山というものが病気にかかっているのだというような想定を考えると、まず、その状況を正しく診断すること、つまり対象となる自然の来歴を正しく知ることが必要です。それを踏まえて、いまの状態をどう改善していくのか。

自然はつねに変化しているものです。里山問題あるいは自然再生の議論では、いつの時代の自然に戻すのかと問われる場面がしばしばあるのですが、その設問はあまり適切ではない。むしろ、どのような生態系サービス、あとで説明しますが自然の恩恵とよばれるものです、自然になにを求めるかということを考えたほうがいい。その次に治療計画を立案するとして、何が制御可能で、何が制御不可能なのか、何が不確定なことなのかということを考える。その立案で大事なのが、モニタリングと順応的管理です。生態系あるいは自然はたいへん複雑なシステムなので、あらかじめ完全に理解すること

はできない、だから注意深く観察を怠りなく、試行錯誤をしながらやっていくしかない。いったん決めたことでも、うまくいかないということがわかった時点で見直す。これは医療の分野でも同じだと思います。

ヒトの医療と違う点は、わたしはお医者さんじゃないので本当はよくわからないから多分違うのではないかと思うというべきでしょうが、医療の現場では、患者にくらべて医者つまり専門家の知識や経験の優位がはっきりしています。けれどもわたしたちの対象である自然については、その自然と長い時間にわたってつき合ってきた地域の人々がいます。その地域の人々は、医者に対する患者、専門家に対する普通の人々という立場ではありません。研究者とは違うけれども、別の種類のさまざまな知恵や知識や経験、それに判断基準をもっている人々です。研究者の深いけれども狭い専門知識とくらべて、けっして劣ったものではありません。また、そのように自然に沿って暮らしている人々は、いろいろなかたちでの利害対立がある人々でもあります。これから説明します生態系サービス、自然の恩恵は、こっちを立てればあっちは立たないというように、すべての人々の要求を同じように満たすことはできないので、どこかに妥協点を見出す、つまり合意形成のプロセスが必要なのです。その合意形成のプロセスで障害となるのは誤った理解です。合意形成ではその誤った理解を取り除く作業が重要で、先ほど申し上げた対象となる自然の来歴を正しく知ること。もう一つ大切なのは、どんな生態系サービス、自然の恩恵を求めるのかということをはっきりさせること。里山学を優れた設計科学にするには、そのベースラインとして優れた実証科学になることが必要であるとわたしは思っています。

わたしが所属しているのは総合地球環境学研究所というところですが、2001年にできた国立の地球環境問題について考える研究所です。ここには学生もいないし通常業務というものもなく、プロジェクトしかないのですけれども、わたしは「日本列島における人間—自然相互関係の歴史的・文化的検討」という長い名前のプロジェクトをやっています。地球研には、このようなプロジェクトが14あって、それぞれ6年間で合計4億円ぐらいのみなさんの税金を使っております。

おふたりの韓国の先生がこれまでおっしゃったように、里山研究というのは、いわゆる理科系の学問だけじゃないんですね。やっぱり歴史をちゃんと知る必要があります。文化を知る必要があります。また経済や法律、政治のこともわからなければなりません。

わたし自身は植物生態学を学んできたものですが、このプロジェクトには植物の系統分類学や古環境学、人類学という理科系の研究者が40名ばかり参加しています。また文科系、とくに文献史学、考古学、民俗学という歴史諸科学や、経済史、環境社会学などの研究者に100名ぐらい参加していただいています。このなかでは北海道の大規模漁業と魚付き林とか、奄美の珊瑚礁での水産資源管理の歴史とかいったテーマで研究を進めているのですが、そのなかでとくに近畿の里山の研究をしています。

里山とは、先ほども定義がありましたが、昔から薪や柴をとったり、炭を焼いたり落ち葉をかいて肥料にしたり、葉のついた枝や低木をきって刈敷にしたり、山菜をとったりというように、さまざまな形で人間が繰り返し繰り返し利用してきた自然です。これはわたしの先生である田端英雄さんが編集された『里山の自然』という本にでてきますが、このようなこれまで人間が得てきたさまざまな自然の恩恵を、生態系サービスという言葉で整理するようになってきました。

生態系サービスは、人間が生態系から得る利益のことです。あくまで人間がどういう利益を得るかという観点から考えたのが、この生態系サービスです。まず一つは供給サービス。これはいろいろな生態系が、里山だけに限らないですが、生産する食料、水、燃料、繊維、化学物質などのことです。生態系が生産するモノあるいは財の観点からみた恩恵を、供給サービスとよびます。二つ目は制御サービス。気候の制御、洪水の制御、病気の制御、生態系の働きでさまざまなことが制御されるという観点からみた恩恵を制御サービスとよびます。三つ目は文化サービスですね。精神性、レクリエーション、美的な利益、発想、教育、象徴性など、自然がわたしたちに文化というかたちで与えてくれるものはたくさんあります。それを文化サービスといいます。そして、それら全てを支える支持サービス。これには土壌形成や栄養塩循環あるいは光合成による一次生産などがあります。国連ミレニアムエコシステム評価では、自然の恩恵をこの4つの生態系サービスで整理したわけです。

それぞれのサービスの間には、トレードオフ、つまり、一方を立てれば他方は立たないという関係があります。森林生態系の供給サービスを考えてみると、材木として使うには年月のたった大きな木が必要です。しかし、薪炭に使うには、もう少し若い、小さな木がいいですね。あるいは森林を伐ってしまって、肥料飼料にする草を生やす草山という使い道もある。山ひとつをとっても、さまざまな使い道があって、それぞれ両立

はしない。供給サービスと制御サービスの間でもトレードオフがあります。森の木を伐ってしまえば、洪水を制御するサービスは得られません。さらに供給サービスと文化サービスの間でも、たとえば材木を育てる針葉樹の人工林とバードウォッチングに適した広葉樹林とは両立しない。

いろいろなサービスの間でこのようなトレードオフが多々ありますから、それぞれのサービスを利用したい人々の間には、利害関係が生じます。里山とは、自然の恩恵、つまり生態系サービスをできるだけ効率的に引き出せるように、人間がかなりの手をいれて改変したものです。この場合に、相矛盾している生態系サービスのどれを優先して人々が自然を改変してきたのが、そこの里山の来歴を知るうえでもっとも大切なポイントです。

ひとくちに里山論といいますけれども、それぞれの地域、それぞれの時代の人々が里山に求める生態系サービスは違います。どの時代にはどのような里山があったのかという里山の歴史論、また、どの地域にはどのような里山があったのかという里山の地域論をきちんと論じることができないと、ちゃんとした実証科学にならないと考えています。

縄文時代から里山はあったということを提唱されているのが、東京大学の辻誠一郎さんです。青森の三内丸山の花粉分析のデータでは、縄文時代に人間がかなり森林を管理していて、自然状態ではありえないクリ林が広がっていたらしい。辻さんは、これを縄文里山とよんでおられます。狩猟採集が生業ですから、求める自然の恩恵は、食べ物としてのドングリになる森やけものが住める森であり、住居や薪に使う木そのものという供給サービスです。これが弥生時代になって稲作が盛んとなれば、肥料や燃料をとる場という供給サービスに加えて、水源保持といった制御サービスが重要になってくる。農耕というものが生業の中心となって、農耕をおこなうための里山というのが生まれてきた。時代によって、人々が里山に要求する生態系サービスは違うんですね。戦後は、針葉樹の植林。その時には、材木を得るという別の供給サービスを里山に求めたわけです。時代と地域によって、何を人々は里山に求めるのか。ここのところを見極めていくことが肝心で、それじゃあ将来、日本では何を里山に求めるのかという問題になります。

里山論の別の側面は、「賢明な利用」、つまり生物資源を枯渇させず、さまざまな生態系サービスをバランスよく利用してきたという例にあたるかどうかです。自分で使う量はたかがしれていますが、売ってお金儲けをしようという、換金がおもな目的となって

しまうと、根こそぎ全部とってしまうということもこれまで起こってきました。しかし、自然の恩恵に支えられて生きてきた人々にとっては、今年もうまくいって、来年も再来年もちゃんと間違いなくうまくいくようなやり方をきちんと考えているのですね。自由に住む場所を移動できない人々にとって、それは当たり前ですよ。だから、さまざまな生態系サービスをバランスよく利用し、しかも資源を枯渇させない「賢明な利用」の例として、里山というのがあげられる場合が多い。

でも実際にどのくらい持続可能かというのは、きちんと調べる必要があります。また時代によって求める生態系サービスが異なりますから、数百年をみていくと同じ里山ではないわけです。人間が、ある資源というか、ある生態系サービスを求めて自然を改変して、ある程度まで持続可能な「賢明な利用」が成立します。しかし時代とともに、産業ががらりと変わる、気候が変わる、人口が増えすぎるということで、破綻することが何回か起こったのだと思います。それがそのまま地域社会がなくなってしまうことにつながる場合もあるでしょうし、資源回復の努力、さっきの韓国の植林の話がそうだと思いますけども、あるいは、別の資源を開拓してまた新しい経済が成立することもある。そうなれば、またある程度は持続性のある別の「賢明な利用」が確立する。そんなサイクルで日本の自然は変わってきたのだとわたしは思っています。

森林資源といえば、最初はやはり木材資源です。近畿の場合では、針葉樹の大木、ヒノキとかコウヤマキとかが建材などにもっとも有用な樹木でした。韓国の真木はナラであるとさきほどのお話でありましたが、日本でマキというのはコウヤマキでしょう。平城京あるいは平安京を造営したときには大量の材木が必要でした。その大木を伐りだすために杣という場所が設定されました。もちろん大木は育つのに長い時間がかかりますから、伐るとなかなか再生しません。そこで、どんどん伐る場所を移動させていきます。

大津市の北に葛川（かつらがわ）明王院というお寺があります。高島杣があり、それを管理する山作所が置かれた近くです。今はお堂を修復中なんですけども、ここは古くから修験の場として知られていて、奥に滝がございます。この明王院を開いた相応和尚という方が滝で修行をされていたときに、不動明王が顕われる。相応和尚がその不動明王に抱きつくと、じつは大きな木材で、それを仏像に刻んだという伝説があります。

ここに日本最古の炭焼き窯を記した絵図が残されています。ここでは修行の場、つまり聖地として森厳さを残したい人々と、木を伐って炭を焼きたい人々の間に生じた争い

ごと、つまり相論とともに、この絵図が残っているのですね。絵図には一本のスギが描かれていて、この木がふたつの村の境界だったはずなのに、境界を超えて炭焼き窯をつくっているということを訴える文書です。森を森のままで守っていこうという人々と、伐って炭にしようとする人々の間に利害関係があったという証拠が、この絵図であるといってもいいでしょう。この葛川からは、材木をネソというマンサクの枝でつくった縄で結束し、筏にして下流まで運んだものでした。そこでは、志古淵（しこぶち）大神という神様をお祭りし、筏師の安全を祈願したのです。

京都盆地周辺は、そもそもは照葉樹林が極相林、つまり原生林だったわけです。ただし、地形によっては、ヒノキやコウヤマキなどの針葉樹が相当あったはずです。平安京の大きな寺院や宮殿を造営するのに材木を伐りだしたあと、人々が雑木林で炭焼きをしたり、薪などを採取したりして、平安時代以降はだんだんとアカマツが増えてきました。さらに低木を柴として刈ったり、落葉や落枝を燃料や肥料として採取したりするうちに、室町時代にはすっかり禿げ山が目立つようになってきました。明治時代になって、植林をしてまたアカマツ林が戻ってきますが、昭和30年代に燃料革命、つまり炊事に薪や炭に頼っていた時代からプロパンガスが広まる時代へと大きく転換してからは、アカマツ林は次第に照葉樹林に変化していきました。また、昭和45年ごろからマツクイムシの被害が拡大し、照葉樹林への遷移が急速に進んできたわけですね。こういうふうには里山が時代につれてどんどん変わっていくというのが、日本のどこでもみられています。

京都の北に、深泥池という池があります。厚い泥炭層がたまっている氷河時代から存在する池です。この泥炭層をボーリングで掘り抜いて、そのそれぞれの層に含まれている花粉を分析すると、およそ1400年前ごろからアカマツの花粉が増え始めます。でもまだ、アカガシの仲間、つまり常緑のカシの花粉もずいぶんとあります。それから1000年ほど前、さらに400年ほど前頃からますますアカマツの花粉が増えてきて、常緑のカシの花粉がどんどん減ってくるんですね。これを歴史的な事実と照合すると、平安京造営は794年ですけれども、それ以前に深泥池の近くでは須恵器を焼いた窯の跡があります。最初は材木として伐ったのかもしれませんが、炭や薪としてカシを伐ったのかもしれませんが。1530年あるいは1550年ごろの京都の様子を描いた洛中洛外図で、京都近郊の山が低木や草地で表現されているのがわかります。また1599年には深泥池の村人が貴船神社のある貴布禰山の草刈権を購入しています。柴山あるいは草山が東山

の北部一帯の景観であったという状況は明治時代の絵画でも示されています。

草刈権とはなにか。先ほど刈敷という言葉がありましたけれども、化学肥料がない時代に、いかに土地の肥沃を保つのかというのは非常に大きな課題でした。多くのところでは刈り取った木の枝を田畑に鋤き込むことがおこなわれていて、それを刈敷といいます。海の近くでは海藻、琵琶湖のまわりでは水草をとって、田畑に鋤き込んでいたそうです。所三男という方によると、田畑1反あたりに10反から12反くらいの柴山や草山がないと地力が十分に維持されなかったという計算になります。また農家1軒あたり薪炭でいうと、年間20駄から30駄が必要。50町歩の村なら、だいたいその3倍くらいの山林がないと一年間の薪が賅えなかったようです。農家を支えるには、そうとう広い肥料用の草山や柴山と薪炭用の雑木林が必要だったんですね。田んぼの10倍、あるいは村の3倍くらいの面積になります。その結果、人口が多い京都の場合には、柴山や草山、山のてっぺんにかろうじてアカマツが生えているという景観になったわけです。龍谷大学所蔵の1808年の『華洛一覽図』でみても、比叡山からずっと方広寺の裏あたりまで柴山や草山が広がっていた様子がわかります。

では、薪炭林というのはどうやって維持してきたのか。いまでも大阪府の能勢ではクヌギで炭を焼いているところがあります。そこでは萌芽再生といって、切株から生えてくるひこばえをうまく育て、実生よりも早く炭に焼けるサイズに育てる方法がおこなわれています。いまの人々が描く里山のイメージは、まず自給自足を前提とするような農山村なのですが、近畿ではかなり古くから商品経済が入っています。明治9年の統計で、おそらく江戸時代後半とそんなに変わらないでしょうが、大阪港で荷揚げされている炭をみると、紀伊あるいは、土佐、日向からたくさん集まっています。薪となると、すこし重くてかさばるので、淡路、阿波、伊予あたりのやや近場から入っていますね。

ふつうは林業というと、苗木を植えてから何十年もかかって、子や孫の時代にやっと売り物になるような産業と思われがちですが、この萌芽をうまく使った薪炭に限っては、8年から10年程度の非常に短いサイクルで、ちゃんと商品化ができるんですね。これは決して自家用の炭ではありません。商品として流通し、ブランドが確立したものです。江戸時代には農書とよばれる農林業技術普及書が盛んに出版されるのですが、1828年に出版された『農業余話』には、クヌギをどういう具合に苗木をつくり、どうやって収穫するか、どういうふうに伐ればちゃんとひこばえが出てうまくいくのか、ということ

が事細かに書かれています。同じ技術は、たとえば栃木県の茂木（もてぎ）にもある。江戸時代に各藩で殖産興業が盛んになったところに、技術はかなり広まったのでしょうね。

里山はそのほかにも、狩猟の場という面もあります。「うさぎ追いし、かの山」です。太平洋戦争中には、猟友会組織を中心に軍部へ供出する動物の毛皮を得るための狩猟が盛んにおこなわれていました。明治から大正、昭和というのは、日本が休みなく戦争をしていた時代ですね。特に北のほうの国と戦っていましたから、軍隊の装備として毛皮がたくさん必要でした。その時代には、日本各地でシカやウサギなどが著しく減少したようです。もちろん毛皮を取ったあとの肉は、食用とされました。猟師が商売になった時代です。

いっぽうで、やはり自給を前提とした物産や地域もあります。丹後半島には、笹葺きの大きな民家があります。雪でつぶれかけた民家を1軒解体して建材を調べたところ、大きな部材ではマツが多かったです。次に多いのがクリ。現在はマツ林にクリという植生はなかなか想像しにくいのですが、クリの大害虫であるクリタマバチが広まる以前には、マツ林の下層にはクリがあったのです。他にはスギ、ヒノキ、ケヤキなどが使われていて、まさしく民家は里山の雑木林そのものだということです。

江戸時代から明治・大正、そして昭和のはじめまで、日本では天然資源を使えるだけ使って、第一次産業から第二次産業までつくりあげてきました。たとえば、製塩、製鉄、窯業など。これらの産業は薪や炭を大量に消費します。そのため、西南日本、とくに瀬戸内海沿岸では木を伐りすぎて、かなりの面積にわたって禿げ山が広がりました。また森林の治山能力が著しく低下しましたから、その頃の川の写真をみるとどんどん土砂がたまってきて、橋脚が埋まるほどでした。

いまの里山の危機というのは、結局、里山が財を産み出さなくなったという点に尽きるのでしょう。昭和30年代に燃料革命があって、燃料が薪炭から化石燃料、なかんずく石油に置き換わってしまいました。それまで生活の必需品であった薪炭がほとんど売れなくなってしまったのです。もうひとつはプラスチックです。昔はわたしたちの台所で使う道具は、木製や竹製だったわけです。それも里山の産品ですね。それがいまはたいいていプラスチックになっています。だから石油文明とよべるのでしょうか、燃料革命と材料革命が同時に起こり、里山の産品を市場から駆逐してしまったわけです。燃料革命のほうがよく知られていますが、材料革命という面がじつは重大です。産油国でも今後

だんだんと石油を節約していった、燃料なんかにはもったいない、材料として温存して
いこうという動きがあるほどです。

最初にも申しましたけれども、現在うまくいっていない里山を治療するために、正しく
診断する方法として、その来歴を学問的な根拠に基づいて知ることがまず基本でしょう。
その次に、いつの時代の里山に戻すのかという議論になることがよくあります。環境
省などでは、昭和30年代の自然に戻すという目標設定がしばしば語られます。里山が
じゅうぶんに採算のとれる財を提供してきた時代に戻すということです。しかし、その
根拠をしっかりと説明するのは難しい。いまだ石油文明は衰えることを知らず、里山が
新しく経済的価値をもつ財を提供する条件が整っていないからです。『三丁目の夕日』っ
ていう漫画ありますよね、あれと同じです。経験された方々にとっては、懐かしい時代、
古きよき時代というノスタルジーがありますけれども、それを感じない人たちに理解し
てもらうのはやはり難しい。ノスタルジーも大事な文化サービスといえないことはない
けれども、他の世代年代に通用するような、ノスタルジーを超えた説得力のある論理が
必要です。

では、里山が供給サービスを低下させてしまった現在、わたしたちはどんなサービス
を求めているのでしょうか。そこには、制御サービスと文化サービスが残っています。
治山治水という古典的な制御サービスに加えて、バイオマスを蓄積して地球温暖化を軽
減する場といった新しい価値も、里山には生まれてきています。また、精神性、リクレ
ーション、美的な利益、発想、教育、象徴性など、里山の文化サービスも忘れてはいけ
ません。

少し別の地域の里山をみてみましょうか。ボルネオ島のサラワクはマレーシア国です
が、ここには熱帯雨林の原生林もあれば、焼畑の休閑林もある。小規模なゴム園もあれ
ば、果樹園もあるといった、モザイク状の自然です。サラワクの森に近い先住民の人々
はどういう生態系サービスを森から受けているのか。原生林では建材、あるいは果物で
すね。それに呪術用の薬などを取りにいきます。若い休閑林には、もっと日常の薪や山
菜を求める。

日本では世界遺産の屋久島。そこでも集落周辺では食用植物や、飼料・肥料、燃料な
どの日常的に利用する植物があり、奥山には特殊な用材あるいは漢方薬を取りにいって
いた。このようなモザイク的な土地利用というのが、さまざまな生態系サービスをバラ

ンスよく得る合理的な方法なのですね。熱帯のアブラヤシのプランテーションや日本のスギやヒノキの人工林は、ひとつの生態系サービスを得るためだけに能率がいいかもしれないが、他の生態系サービスを完全に犠牲にしているわけです。このような自然の利用は短期的には成功するかもしれないけれども、景気の変動に左右されやすく、結局は持続性を欠くものになってしまう。

最後に生態系サービスのうちの支持サービスについて。生態系を構成する生物を安心安全な第一次産業の指標とする考え方を紹介します。たとえばコウノトリですね。「コウノトリの郷米」というコウノトリを育む田んぼで栽培した安心安全の米というのがあります。他にも「西表ヤマネコ印安心米」とか「ゲンゴロウ米」とか。これは今年の春に宮浦先生も一緒にいったオーストリアのドナウ川沿いの農村風景です。もちろん水田はありませんが、ライ麦畑やブドウ畑、トウヒの植林などモザイク状の土地利用がみられるオーストリアの里山といってもいいような風景です。昔はブドウ畑をずっと山の上にまで段々畑でつくっていたのですが、チリや南アフリカ産の安いワインが入るようになり、また農業従事の方が高齢化して、山の上の不便なブドウ畑は放置されて雑木林になっているのが現状です。日本の棚田と同じですね。きれいなお花畑があるんですけど、ずっと人間が草地として使っているから、使わなくなれば、たちまち低木林になってしまいます。ふつうは除草剤や農薬、化学肥料を使って非常に整備されたブドウ園になるのですが、ほんとうは肥料もあまりやらず、農薬も使わないブドウ畑のワインのほうがおいしいのだそうです。そういう有機栽培のブドウ畑で希少植物のランがたくさんみられます。このランをシンボルにブランド化して、きちんと有機栽培をやっているという指標としてランをワインのラベルにしているのですね。このような安全安心でおいしい農作物の指標として生物を使ったものを生物ブランド農作物とよびます。

なぜ、里山が日本に必要なか。それは農林水産業の基盤として、なくてはならないものだからです。農林水産業は重労働です。これまで日本の政策は重工業を興し、なるべく農林業を外国に頼るように誘導してきたといっていいいでしょう。しかし、いまのように食料の大部分を外国に依存するような生活がこれからもずっと続くとはとうてい思えません。農林業の基盤としての里山・里地は、いまは財を生まないけれども、50年後100年後には、きっと見直されるときがきます。そのためにハードウェアとしての里山、ソフトウェアとしての里山を維持し利用する知恵を、いまの時代にわたしたちの都合で

減ぼしてしまうことはできないのです。

現在にふさわしい里山の生態系サービスとは何か。二酸化炭素を吸収するという制御サービス、リクレーションや環境教育の場、あるいは農家民宿のようなグリーンツーリズムなどの文化サービス、さらに希少生物の生息地や安心安全な農林水産物生産の基盤という支持サービス、そういうものが現代にふさわしい、あるいは未来につながるような、里山生態系のサービスであろうと思います。過去のどの時代に還すのかということとは考えず、都市近郊で経済的な見通しが立ちそうなところでも、あまり大規模なことを企てないで、小さな営み、つまりグローバル化を敵にまわさないスモールビジネスをなるべくたくさん興していくこと。

地元の野菜をつかった漬け物でいいし、地産地消をめざした小さなレストランやお弁当屋さんでもいい。都会に勉強にでた青年が、都会で出会ったパートナーと故郷に帰って、一家がなんとか養え、地元のみなさんもやさしく見守るような小さな営みと、それを応援する行政。そんな心温まる世界が広がって欲しいと思います。いっぽうで経済的なインセンティブが望めない条件下では、里山の公益的機能を考えて、地権者だけに管理責任を押し付けず、さまざまな主体が里山に関われる仕組みをつくること。里山復権は、そのあたりからでしょうか。

どうもご清聴ありがとうございました。